

## 9. 杉野屋の祭礼とコミュニティ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4986">http://hdl.handle.net/2297/4986</a>

## 9. 杉野屋の祭礼とコミュニティ

嶋 田 進

- I. はじめに
- II. 神社と祭礼
- III. 獅子舞
- IV. 三十三年祭
- V. 祭礼の機能とコミュニティ
- VI. 考察
- VII. おわりに

### I. はじめに

杉野屋では、神事である祭礼が、今日まで永々と継承され、子どもたちも加わり区民総参加（女性たちは人足や来客の接待など）で、コミュニティ活動の中核を占めている。

また、「御開帳」（大祭）と称して、三十三年祭が菅原地区の菅原神社と共に開催されている。

ここでは、なぜ、今、「祭礼」なのかを考えるために、杉野屋の祭礼の中で、大変重要視されている獅子舞について特に触れなければならない。神事の所作を演じる獅子舞について、その由来や伝承、獅子の構成、たとえば獅子頭、演舞者、ハヤシ、演舞の特徴などを明らかにするとともに、祭礼がコミュニティに果たす役割を探りたい。

### II. 神社と祭礼

#### 1. 神社と祭神

杉野屋の神社は、現在、天満宮（神社庁登録は菅原神社）と呼ばれている。

いつ頃杉野屋地区に、神社が生まれたのかは定かではない。宮司であるG氏は、天満宮に白山の神が合祀されていることから考え、白山神社が最初の神社であったろうと語っている。

神社の起源については、特定できないが、天満宮の由来について次のような記述がある。

村上天皇の御世（1014年前）の天徳4年6月、菅原村の住人である国武（国田の先祖）、

左官（西願の先祖）の両人が「菅公を北野天満宮よりお迎えせよ」という夢を蒙ったので、上洛し、この神託を天満宮の別当へ言上した。たまたま同年同月、京都北野の住人吉信（北野善治の先祖）、兼曾（金曾の先祖）の両人へ『我（菅公）を能州菅原村より迎えに来る。その節は御供して下向すべし。』との神託があり、この由を北野の坊へ進言した。二つの夢が合致するわけである。このことが叡聞に達し、勅令によって管相御自作の尊像を附託することになり、北野の吉信、および国武、左官の3人が共奉して下向した。

管相の尊像のうち一躰は、今の菅原に鎮座し、国武、左官は、この地に居住し、今も子孫が残っている。ちなみに往古は菅原と杉野屋は一村であったが、承平年間（610年前頃）に分岐し、杉野屋は杉野屋村と称し、一村になったわけである。さて、北野の吉信は管相の尊像（本殿に鎮座）と管公の守本尊である観音像を供奉し、杉野屋に留まり、剣梅鉢の家紋を賜って、これをお護りして、永く当地に居住し、今も子孫が残っている。また、神託を蒙った北野の兼曾九郎兵衛については、いわゆる残務整理をして、一年遅れの翌応和2年（1015年前）に吉信を追い、杉野屋に来たり、吉信と共に天満宮・観音像をお護りして、杉野屋に永住することになったわけである（『日本王代記古老紀談』<sup>1)</sup>）。

天満宮本殿鎮座の御尊躰は、中央に天満宮菅原道真坐像、左側に白山宮安永梵天（なりわい神）、右側には、若宮八幡大神宮応神天皇坐像の三柱が安置、三社が合祀されている。いつ頃合祀されたのか定かではないが、上記資料に、御尊躰の修理年代の記録が明記されている。それによると、天満宮の御尊躰は、1668年8月14日、1729年3月吉日、1797年7月大吉拜日、1903年7月吉日の4回仏師によって修理されている。若宮八幡大神宮の御尊躰は、1668年8月14日、1729年3月吉日と、天満宮の御尊躰の修理と同時に行っていることが分かるが、1779年6月、1790年8月、さらに1797年7月にも修理している。白山宮のそれは、1661年7月、1668年8月、1729年3月、1797年7月となっている。この修理年代からすると、白山宮の方が天満宮よりも7年早く御尊躰を修理していることになる。修理を担当した仏師名がそれぞれ記録されているが、いずれも江戸時代になってからである。

ところが、1902（明治35）年5月14日、本殿・拝殿が類焼にあい貴重な古文書等が焼失したが、本殿の御尊躰だけが搬出され無事災難を逃れた。早速翌1903年9月に本殿・拝殿を再建、御尊躰を遷座し、現在に至り、K氏が天満宮を管理（宮係り）し、日頃から気を配っている。

また、赤坂宮（杉野屋の南方垣内地内にある社）の御尊躰は、『志雄町史』によると、御神体は石造の神像で、昔、「浜田」地内の田の中からあがったものと記述され、L家には、宮守家の印として、菅原道真の画像が伝わっているとのことである。しかし、赤坂宮を管理（宮係り）しているL氏によると、2回の遷座を経て「垣内」地内の山手の現在地に鎮座し、御尊躰は、菅原道真坐像であるという。

さらに、観音山に西方に面し、観音像を安置している観音堂がある。現在、M氏が管理している。この観音像の由来について、上記資料には「天徳4年、京都北野の吉信が管相の尊像と一っしょに供奉し、観音山に奉祀した」とある。その中に、作者については、首は弘法大師の作、胴は恵神の作と誌されている。また、「伝承によれば、鎌倉時代の運慶の作とも言われているから、何らかの事情で中途に取り替えられたものと思われる。最近の鑑定によれば、現存のものは徳川中期の作で作者不明の像であるという」(同上)。

天満宮も赤坂宮も神社であるので、本殿は南向きである。

## 2. 祭礼の変遷

以下では、杉野屋で行われている祭礼のうち、最も重要な秋季祭礼(通称秋祭り)について、その1930年以降の変遷を聞き取りによってたどり、記述したい。

戦前は、1軒1軒を神輿や獅子が巡回し、宮司は各イエごとに祝詞をあげ、宿(休憩所)は、禄高のある26軒の地主のイエ(通称オヤッサマ、行政を司る「鍋のふた」と呼ばれる)と決まっておき、「有力者中心の祭り」であったようである。

C氏(80歳代の男性)によると、小作人たちは宿の世話(準備、賄い、後始末など)をし、座位も上下関係があり、御膳も異なり、祭礼は翌朝まで及んでいた。地主である26人は、常に神輿の周囲に紋付・袴姿でお供し、夜になると、家紋の入った提灯を持ち、警護役でもあった。26軒の家紋入りの高張(3メートルほどの棒にさした高張提灯)が神輿の周囲を照らしていた。

青年団は、15歳から30歳、壮年団は31歳から42歳であったが、人足は有り余っていた。「お寺の境内で舞台を組み演劇をしたり、歌を披露したり、他所からも大勢やって来て、盆踊りを行ったこともあった」という。このことから、「祭礼」は、他所の人たちとのコミュニケーション、交流の場ともなっていたことが伺える。

獅子舞は、若者組(現在の青年団)によって運営されており、集落の若者たちが15歳になると、全員が加入をしていたが、獅子舞を舞えるのは、イエの相続者となる資格をもった長男に限られていたようである。霊獣である獅子頭や天狗面を被って舞うことは、誰にでも許されるものではなく、獅子舞の人足たちは相当の特権を持っていたことが分かる。次男以下や他所から入って来た婿養子などは、おそらく若者組に入っても獅子を舞うことが出来ず、獅子舞の装具用品や用具箱などを担ぐ脇役に奉仕するに過ぎなかったと考えられる。それほど獅子舞は、権威と格式や継承伝統を重視していたのである。

戦後、区行政が改革され、「祭礼」は、区民たちにとって、従来に比べてより平等な単位として、集落内のイエが融合・一体化し、集合意識を再活性化してエネルギーを放出しうる機会となってきたと思われる。A氏(60歳代の男性)は、「祭りがやってくるのを楽しみにして農作業

に励んだ」といい、また、B氏（70歳代の男性）は、「お金がかかるが、他所の親戚や友人・知人を祭りに招待することが喜びであり、それを生きがいに頑張った」という。

B氏によれば、1955年頃までは、祭りに対する住民の意識は高く、豊作への感謝の気持ちが強く、前向き、建設的な意見こそ出ても、現在のように苦情が出ることはなかったという。住民たちは、朝から晩まで「祭礼」を盛りあげるのに勤め、集落は祭り一色に染まっていたとの声も聞いた。その当時のマツリンド（祭りをを行う人）たちは、他所から親戚などを招きご馳走をしてもてなし、生きている喜びを互いに分かち合っていた。

人数が多いため獅子舞に参加したくても、参加できない人たちは、天狗の面がなくても、「獅子のカヤ」を休憩時に借りて、普段着で、3～4組位、次々と獅子舞の余興に興じ、周りから爆笑や拍手喝さいを浴びることもあったようである。また、昔とった杵柄で、OBたちもパフォーマンスを披露する一幕もあったとC氏は語っている。

神輿オカイデ（人足）は、戦前は白装束姿であり、戦後は物資不足などの理由から普段着であったが、1975年ごろから法被姿になったようである。

1982年ごろから「御神燈」（家の玄関に掲げる灯明）が在所中に配られるようになり、その木製の骨組みは、青年団が作っているようである。現在、「御神燈」の張り紙は、1枚260円で、張替えの場合には、区長または書記宅へ連絡することになっていて、祭礼の飾りに花を添え、宵になると灯りが入り、「神を迎える」神事ムードを高めている。

1987（昭和62）年10月14日に立山合金株式会社が杉野屋地内に創業され、中心部からここまでの往復2キロほどの巡行は、重い神輿ゆえにオカイデたちにとって負担となってきた。しかし、万雑割りもあるので渡御しないわけにはいかない。遠いとの理由から神輿を台車に載せて引き、会社門前まで運ぶこととなり負担の軽減をはかっている。しかし、太鼓台（太鼓がセットされた台車）は、自動車の往来もあり引くのが大変であることから現在、会社まで同行していない。

### 3. 現行の秋季祭礼

現在では、秋季祭礼を「班祭り」と呼び、組・班単位で宿の用意や神輿などの引継ぎを実施している。

以下では、2002年9月14日の秋季祭礼の概要について記述する。

秋季祭礼の細目は、毎年、8月25日に集落センターで開催される第4回役職員協議会（区役員と15の班長から構成）で決定される。事前に、前年度の反省を踏まえ、青年団と区長が会合を持ち、祭礼の順路や受け渡し時間・場所などの試案を作成し、役職員協議会に提案している。決定事項については、その後、区民（4組・15班構成）に回覧し、祭礼執行の周知徹底を図つ

ている。

祭礼当日は、天満宮の境内には、神の依り代である杉材で7メートルにも及ぶポールに白い幟旗が、観音堂、赤坂宮、地蔵堂（地区の中心部広場にあり、地蔵信仰の名残りをとどめ、現在は観音像が安置）前にはそれぞれ4メートルほどのポールに赤い幟旗が靡く。

アサト（朝出、最初に人足をする人）の4組（11～14各班）と青年団は、午前8時までに天満宮に集合し、神事渡御準備を行う。予定では天満宮出発は、午前8時30分、観音堂で神事を行い、受け渡し場所は、N氏宅で午前11時30分、3組（8～10各班）へ。宿は、O氏宅である。2組（5～7、15各班）はクボの橋で、午後2時神輿などを3組から引き継ぎ、立山合金に出向き、集落センターで休憩し、地蔵堂前で午後6時、1組（1～4各班）に引き継がれる。宿は、集落センターで、赤坂宮、地蔵堂前から天満宮へと巡行し、宮上りは午後10時と決められた。

各宿の滞在時間は、1時間とし、ただし、集落センター使用は、40分間と決定された。祭礼の宿は、2軒と集落センターの合計3箇所であるが、青年団の方から嘗ての4軒の宿に戻して欲しいとの意見が出ているという。それは、獅子頭が重く、交代要員がないので、大変疲れ、途中で休憩時間が必要であることが主な理由である。1995年ごろから青年団加入者が減少し、15人程度では、獅子を舞わすのが困難な状況である。

祭礼のフィナーレは、神輿、獅子舞の宮上り（宮入）である。地蔵堂前で「獅子殺し」を終え、境内に近づくと、ベッサイ、天狗は、面やヨボシを取り外し、背中にぶら下げ、豆絞りの手拭で頬被り姿となる。獅子も蚊帳を脱ぎ、やはり頬被り姿で、胴幕は1本のロープのように振じて、左右に振りながら上る。キドボリの曲に合わせて仕掛け花火、打上げ花火が降るような鳥居からゆっくりとした歩調で、左右の藁松明（迎え火）が燃え盛る間を左に進行方向をとり、拝殿につらなる石段を登り進む。オガヤ、コガヤの呼応する「ヨイヤサー、ヨイヤサート」の掛け声が更け行く鎮守の森に木霊する。それに続く神輿も、「ワッショ、ワッショ」と、大声を発しながら勢いよく登って行く。

拝殿にたどり着くと、双方の天狗は、獅子の肩に乗り、神輿や15本の高張（各班の高張提灯）と共に、大きな掛け声で拝殿の周りを右回り（時計回り）に、3回半回るのが最大の見物である。

渡御の警護役は、各班長が司り、常時渡御に随行、順路の細部に配慮することとされている。また、各班長には、受け渡し時間を守るように指示する権限も与えられている。区長と氏子総代2人は、警護役と同様常時神輿にお供することになっている。

祭礼の行列は、カマ（神輿渡御に邪魔になる木の枝を切る役、1人）、神輿（15人ほど）、蛇頭（柱上に龍頭をあしらい神輿の護衛役の赤旗、2人）、剣（柱上に剣をあしらい神輿の護衛役の赤旗、2人）、ベッサイ（青鬼面を付けた荒ぶる神、1人）、天狗（天狗面を付けた猿田彦命

役、2人)、オガヤ(獅子頭を付けた大きな蚊帳、5人)、コガヤ(獅子頭を付けた小さい蚊帳、4人)、獅子舞伴奏(笛3人、鉦1人、太鼓1人)、台付太鼓(3~4人)、で、他に子ども神輿(Y氏「大工」作製寄贈)が別コースで参加する。

神輿やベッサイ・天狗・獅子を迎える観音堂、赤坂宮、宮入りの天満宮には、藁松明(「迎え火」といわれる2メートルほどの葉つきの竹に藁を掛け、聖域に入る直前に燃やす)を掲げ、神を歓待している。渡御する神輿に向かい、丁寧に手を合わせ祈っている高齢者の姿も見られた。

祭礼を経費面から見ると、2001(平成13)年度の収支決算書によれば、祭典費1,060,001円、神社諸経費として156,836円、その他83,220円で合計1,300,057円が支出されている。これは、2001年度一般農業会計支出額の約21.5%に相当する。さらに青年団(獅子舞)へ400,000円、子ども会へ20,000円、その他96,000円が助成金として支出されている。また、イエイエで客を接待すれば、それにも経費や労力時間も必要である。世帯数166戸の杉野屋としては、カネ(万雑)・モノ・ヒトの面で祭礼実施は負担であるに相違ない。

戦後間もない頃から1975年代にかけての祭礼隆盛時代を懐かしく語る人が多い反面、「こんなに経費を使う祭りにどんなメリットがあるのか」という疑問を抱いているD氏(50歳代の男性)も存在する。

### III. 獅子舞

#### 1. 杉野屋の獅子舞

杉野屋の獅子舞は、960(天徳4)年、京都北野神社御分霊勧請によって、菅原地区と同様に始まったと伝えられている。これが史実であれば、千年以上の歴史があることになり、関西からの伝来ということになる。

現在、志雄町には、越中系(富山県氷見市からの伝来)と能登獅子の両系統が存在しているが、杉野屋地区と菅原地区のみが能登獅子で、他地区は全て越中獅子の流れを汲んでいる。

1973年(昭和48)年に見学したとき、キリコ(奉燈)も参加し、大勢の見物客で賑やかな杉野屋祭礼であった。若者たちの意気込み、祭礼にかける情熱が伝わってきた。招待してくれた友人も獅子舞を誇らしげに語っていたのが印象的であった。

1986(昭和61)年の秋季祭礼のビデオを見ると、キリコが参加している。いつ頃、キリコが祭礼から姿を消したのかは分からないが、見物客も多い。

ところがこれに比して、29年後の昨年は、午後から多少の降雨のせいもあるが、地藏堂前の

獅子殺しや宮上りを除き、見物客はまばらであった。しかし、百足獅子（立ち獅子に比べ、カヤの中の人足が多い獅子）である杉野屋の獅子舞には歴史と伝統、先祖から受け継いできた魂があると、F氏（50歳代の男性）は述べている。

天狗役には、運動神経が発達した人が選ばれ、中でもI氏は、足を高く上げる演技で、その技術面でも大変定評があったとC氏は語っている。また、彼は、よく練習を重ねたようである。昔は、「頭振り（頭持ち）」は、盤持ち（大石を持つ力比べ）で鍛えた人があたり、8月末から2週間ほどはその体力づくりに励んだという。

杉野屋では獅子頭を彫っている人が存在している。仏壇横の床の間に、獅子頭を守護神として祀っているイエや天狗の面を魔除けとして大切にしているイエも見られる。

## 2. 獅子と演舞者

杉野屋には、オガヤとコガヤが存在し、人足の衣装も異なる。オガヤ担当者は、素肌に白い腹巻をし、胸当・前懸（社紋房付、赤地に下方に太い2本線）をして、手甲・股引（巻手とか三ツ星染）・白足袋・草鞋・豆絞り手拭鉢巻・赤の腰紐姿である。これに対してコガヤ担当者は、白いシャツの下着に上記の衣装を身につけている。オガヤの担当者の衣装は紺色であるが、コガヤのそれは茶色系である。これは、オガヤとコガヤでは蚊帳のサイズも異なるが、格式も異なることを表しているといわれている。

獅子頭は赤漆塗りで、越中系に比してやや小さいが竜型で頭部が長く、左手を顎の下に入れ、右手を上部に上下左右に舞わすのが特徴である。獅子頭の材質は、桐木で、製作地は富山県井波市である。越中獅子頭は、耳が垂れているが、杉野屋の獅子は耳が長く、横に張っており赤い舌を持ち、角は黄色団子状で丸く、口を大きく開閉したりするのが大変特徴的である。獅子舞関係の祭具は、通常は神社の倉庫に格納されており、祭礼が近付くと、手入れをし、練習の都合上集落センター2階に保管され、青年団の管理下に置かれる。

獅子頭を持ち、演ずる者を「頭持ち」とか「頭振り」と呼び、獅子頭が重いので体力と相当の腕力が要求されている。立ったままでなく演目に合わせ舞わすので、いわば起き伏して勇壮また繊細な所作を演じなければならない。

獅子の胴体の蚊帳は本麻製であり、牡丹巻毛の唐草模様である。オガヤは、紺色系で全長約5メートル、コガヤは、4メートル10センチほどで茶色系に染め上げている。越中獅子のような尻尾がなく、持ちやすいように20センチほどの手を掛ける穴が蚊帳の左右に開いている。獅子の勇壮で微妙な動作には、リズムに合わせる人足の阿吽の呼吸が非常に大切になる。獅子は、祭礼では、神輿の先導役をつとめ、露祓いの役割をしている。宿で宮司が祝詞をあげている時は、オガヤは家の中に入り、お立ちのときは、各玄関から導かれる。

杉野屋の祭礼では、12人（各カヤ人足を含め）の演舞者が登場する。1人はベッサイ面（青鬼面）を被り、緑のズッカブリを背なに垂らし、天狗の所業の大部分を管轄して、祭礼の先頭を切って進行する。これは、越中獅子では見られず、能登獅子の特徴でもある。能登地区では、ベッサイは、天狗の配偶者的存在としての役割を果たしている地域もあるが、杉野屋では、周囲を整理し、露祓いの役目を担っている。

このベッサイは、宿の前の化粧砂（砂を円錐形に25センチほど盛り土の上部に、杉の枝をさしたもので、「盛り砂」ともいう）を最初に蹴散らす。その後天狗、獅子と続くが、これには、邪気を祓い清める意味があると言われている。杉野屋では、ベッサイ役は、次期天狗役に任じられる予備役があたっているのが特徴的である。

天狗は、オガヤとコガヤに各1人が存在し、それぞれ猿田彦命に見立てている。『志雄町史』によると、「杉野屋の祭礼に使われる天狗の面は、昔の猿楽の面と、今の天狗の面を合わせたような珍しいもので、かなり古いと思われる」とある。この天狗は、大きな烏帽子（ヨボシと称し、剣梅鉢の紋の下に2本線の入った）を被る。昔は、もっと高いヨボシであったようである。ヨボシは、竹編の上に和紙を貼り、シブ、漆塗りである。天狗は、赤鼻高仮面を付け、鉢巻飾りで締め、上衣の袖（広袖）・胸当・裁着袴（巻毛肉色染め）・長手甲・白足袋・草鞋履きの衣装で、手には、140センチほどの女竹を持つ。これは、武士の旅姿のいで立ちを表し、道中苦難に遭遇しても、格闘によって悪を祓う能力を秘めている姿であると言われている。獅子殺しの際のみ、天狗は刀を手にする。

天狗はベッサイに続き、獅子・神輿の前に行く。舞になると、常に獅子との対決姿勢を演じ、「獅子殺し」も行う。神輿の出御前に、天満宮で獅子舞人足の代表として、お祓いを受けるのはオガヤの天狗役のみである。

ベッサイ・天狗・獅子舞人足以外の人足は、「オカイデ」と呼ばれる。この語源はよく分からないが、神輿を担ぎ、「神と人とが一体」となり、街道に出る人という意味があるのではないかと。即ち「御街道出」が短縮された言葉のような気がしてならない。ベッサイ・天狗・獅子は、聖なるものであり、神聖性を持っているので、ただの人ではないのである。したがって、その人足には、「オカイデ」という表現はやはり適当ではないと考えられる。

これら獅子舞の衣装は、新婦（その年に結婚し、杉野屋在住の女性）たちが縫っている。

### 3. 演奏（ハヤシ）と演目

ハヤシは、笛「横笛」（3人）、太鼓「ツツミ」（1人）、鉦「裏鉦」（1人）で合奏され、白ズボン、法被姿である。笛を吹き拍子を取り、太鼓と鉦のリズムが美しいハーモニーを奏で、越中獅子の躍動的な舞に比べ、杉野屋の獅子はスローテンポで優雅な感がする。ハヤシ方は、常

に獅子、天狗、ベッサイの舞が見える場所に位置して、調和を醸し出している。

獅子が舞わされると、時に応じて周囲から「ヨイヤサー、ヨイヤサート」や「マイゾ、マイゾ」という掛け声を掛けて、激励する。

演目は、①チシャロ、②カイチョウボ（コガヤ専門）、③キョウブリ、④カマヤ、⑤ヨッサキ（オガヤ）、⑥チャナバ、⑦獅子殺し、⑧ギオンバヤシ、⑨キドボリの9種類がある。それぞれの舞には意味がある。例えば、「ギオンバヤシ」は、天狗と獅子が最後に対決する舞で、天狗が獅子の目を回そうとする舞であり、天狗と獅子の格闘をストーリー化している。中でも、地藏堂前で40分余りも演じられる「獅子殺し」には、大勢の区民、他所の人たちが周りを取り巻き熱い視線を送り、激励し、最高潮に達する。演ずる者とそれを見る者とが見事に一致する瞬間である。

越中獅子の殆ど多くは、宮上りの後に「獅子殺し」を舞うが、杉野屋では宮上りの前に格闘後天狗が獅子に止めを刺し、観衆（見物客）を祭りごとの興奮の坩堝に陥れている。

「獅子殺し」のあと、宮上りにおいて天狗は、ヨボシもマスクも脱ぎそれを背にし、獅子も蚊帳を振じて肩に掛け、天狗役は獅子人足に肩車となり、神輿、高張と共に拝殿を3回半回る。その理由について多くの方は、分からないとか、昔からそのようにしているとか言っている。宮司は、「三下り半」の意味、すなわち「これで最後である」という意味を表しているのではないかと語っている。しかし、獅子舞の衣装を外してまで回る必要があるのかという疑問が残る。というのは、宮上りの時点で、ベッサイ、天狗、獅子は、衣装や面をとることにより神聖性を失っており、ヒトとなっているからである。天狗が獅子に馬乗りになり、拝殿を回る所作は、「聖なるもの」から「俗なるもの」、「非日常」から「日常」の転換を示しているのではないか。

志雄町吉野屋在住のP氏（吉野屋獅子舞の指導者）は、吉野屋の祭礼（9月23日、以前は9月18日）で、拝殿を3回半回るのは「御神体を奉安している神輿」のイベントであると語っている。志雄町で、祭礼に越中獅子を演じている各地区では、天狗が面やヨボシを外したり、獅子が蚊帳を抜くことなく、あくまでも神輿の露祓いを勤め、拝殿を3回半回っているようである。その時の獅子の発する声は、「アアッ アーリャサッサー、アリャサー」とスローテンポで、一段と低い声であるという。そして3回半拝殿を回った後に、「獅子殺し」を実施しているとのことである。

志雄町柳瀬のQ氏は、3回半の意味がよく分からないとしながらも、P氏と同じような話をしている。

#### IV. 三十三年祭

祭礼は、《聖なるもの》と接触する有力な方法であると考えられる。

杉野屋の御開扉の祭り（大祭）である三十三年祭について次の記述がある。

「杉野屋の天満宮、菅原の菅原神社ともに北野天満宮から下向された由来により、33年目毎の菅原天神御開扉の時、杉野屋村の天満宮と観音像が菅原村菅原神社へ出向されるのである。その時には、杉野屋村より神輿を天王松（村界）まで供奉し、菅原村は神輿をたずさえ、お迎え奉り、ここで天満宮、観音像を菅原の神輿へ移しかへ、お連れするのである。

菅原より杉野屋へ御帰座なさる時も同じことを行うのである。しかし、中古になりては天満宮の御尊軀は出開扉せず、本殿で神移しの祭りを行い、天王松まで観音様をお見送り、お出迎えなさることになったのである。御開扉祭には前述のように北野、兼曾の子孫が供奉し、開扉中には菅原神社に留まり、お側近くに、お仕えし供奉するのである」（「北国巡杖記能登誌」<sup>2)</sup>。

菅原神社の社記によれば、御開扉祭は、「1605（慶長10）年に始まったと伝えられている。なぜ1605年なのか。推察すれば、利家亡き後の前田家の保護があるかないかの不確実な情勢の中で、利家の7回忌を契機に大々的な道真の鎮魂祭を行うことによって、2代目以降の前田家の保護を取り付けようとする計略であったと考えられる。当社でもっとも古い1678（延宝6）年の慶額がこの大祭を記念して奉納されたと伝えられている。ただし、最近は必ずしも33年ごとの定期的なものでなかったらしい。資料を通して確認される定期的な大祭は、1817（文化14）年以降であり、1849（嘉永2）年、1881（明治21）年、1913（大正2）年、1946（昭和21）年、1979（昭和54）年と行われてきた。これらは慶額によって確認される。ただし、文化14年の慶額は事情により現在は存在しない」（「菅原神社創建、50年祭と33年祭」）とされる。

五十年祭から三十三年祭への変化については、上記のように宮司が記しているが、五十年祭となると、区民たちにとり、生涯においてこの「御開張」（大祭）に出会うことが出来ない人も多く、その「御開帳」の継承や運営についても困難をきたすことにもなりかねない。そこで、仏事にしたがって三十三年祭となったのではないかと思う。

特に2002年は、菅原道真公千百年祭に当たるので、9月22日（日）に天満宮で「区祭り」が行われた。

## V. 祭礼の機能とコミュニティ

杉野屋には、廃止になったものもあるが、年間の「祭礼」は次の通りである。

元旦祭（1月1日）、左義長祭（1月14日、現在廃止）、成祝祭（2月9日）、鎮火祭（3月1日）、春季例大祭（4月25日、天神様の命日、通称春祭）、鎮火祭（5月14日、明治時代の大火によって生まれ、通称火祭、現在廃止）、杉野屋溜池祭（5月27日）、虫送り祭（6月23日、現在廃止）、溜池祭（7月20日）、観音祭（8月16日、御開扉）、秋季例大祭（9月14日、通称秋祭）、新穀祭（11月23日）。その他に33年ごとに「御開扉」と称する三十三年祭がある。

獅子舞は、笛、太鼓、鉦などを伴った一種の総合芸術であって、形と音と色とが鮮やかに描き出す独特の雰囲気があり、周囲を魅了する力を持っている。そこには、獅子舞をリズムカルに美的に行いたいとする人足たちの気持とそれを見て楽しもうとする人々の感情が交錯する。

天満宮、観音堂、地藏堂、宿などの一定の場所で獅子舞の演技に対し、ほめ言葉「マイゾ、マイゾ」などという表現は、礼儀作法であり、集団的な尊崇や敬意の現れであり、コミュニティ創造の基礎になっているように思う。宮上りの様子をひと目見ようと参集してくる観衆（見物客）たちも消極的な参加者である。地藏堂前での40分にも及ぶ獅子殺しが終わるや否や、天満宮境内は足場がないほど観衆たちによって埋め尽くされる。観衆は我先と、眺望のきく格好の場を求めてなだれ込む。演ずる者と観衆との混融した《われわれの集団》を形成することは、獅子舞の持つ農村娯楽としての特質性なのかも知れない。

役職員協議会の議事録からは、祭礼について、メンバーの合意が得られるように努力していることがうかがえる。例えば、「各戸の神供物は各班毎に班長宅に持ち寄り班祭りをする」、「神輿の随行用提灯は適宜見計らい各員に直接手渡す」、「宮上りの組は昇神祭後、神輿の装具用品を点検し倉庫に納めること。警護役はこれに立会い、破損、紛失品があれば区長に報告する」、「天狗面、ベッサイ面及び獅子頭などは、貴重な備品なので破損をしないよう取り扱いには特に注意すること」、「神輿の通行で障害になる木々の枝等は、各自で枝切り等して下さい」、「各班の高張持ち（15人）は午後6時までに天満宮に集合し、係りより高張を受け取り宮上り終了まで常時神輿に随行する」などについて祭礼執行に当たり周知徹底を図っている。

これからも分かるように、秋季祭礼は、神社を中心として、氏子（区民）の奉仕によって営まれるコミュニティの神事である。各戸の神供物を各班毎に班長宅に持ち寄り「班祭り」を行っている。かつては、神霊を迎えて郑重に飲食を勧め、その同じ食べ物を末座で、相伴（直会）することによって神人合一の境地に達する点に祭礼の本質があったようである。家でも、神棚の供物は、後から飲食し、加護を受けているようである。

祭礼は、杉野屋のコミュニティや集団の安全と平和、生産と繁栄を祈って行われるが、前に

触れたように秋季祭礼は、ある意味で日常生活から解放される時でもある。また、祭礼は、社会生活に一種の弾みをつけ、普段の仕事に一層精を出させる効果をもっていることが、住民への聞き取りから伝わってきた。さらに「祭礼」というものの性格の中には、過去に対する追憶の情といったものが含まれているように思う。

時代の波に洗われて「班祭り」と称して、外形は変わってしまっているが、現在も残る年中行事としての「祭礼」を考えると、生産過程の折り目ごとに、神を祀ることによって、五穀豊穡や子孫繁栄を祈願してきたことが分かる。また、五穀豊穡の神への感謝の祝いでもある祭礼の料理に、決して「葱」は使用しないという。昔、宮司が「葱」で、目をついたことがあり、それ以来祭礼の料理には、「葱」の使用はまかりならぬということで、今でも杉野屋ではそれを頑なに守り続けているとH氏（60歳代の女性）が語っている。

笛、太鼓、鉦の音が耳に入ってくると家にはジツとしていられない気持ちになるとE氏（70歳代の男性）はいう。直接獅子に入らない人にとってもこの神事の芸能に参加する共感を呼び起こす機会でもある。これも獅子舞が持つ大きな機能であると思う。

なお、忌みの掛かった人（死者を出したイエ、エンガカリ、イミハズレとか言われる）は、祭礼には参加できない。これは、神聖さに死者の穢れが及ぶとされるため、今でも守っているようである。

以前は、招待の家には、白い旗を立てたようである。嫁の実家へ婿が「ウチアゲ」と称して、招待を受けたり、叔父、叔母や就職先の上司、従兄弟、また従兄弟なども御神酒などを持参して出向いたようである。農業が機械化されるまでは、「結い」（エー）が存在し、田植えや稲刈りなどの場合は、人手・労働を「カシタリ」、「ナシタリ」する互助的な労力の交換的な貸し借りの慣行があり、その結束も固かったようで、共同作業が盛んな頃、祭礼時に「呼び、呼ばれ」は当然であったとJ氏（70歳代の女性）は述べている。

A氏は、「若い時は、神輿を担ぐことでエネルギーが、最高度に発揮された」と語り、「祭りは、1年で一番燃える日であったし、皆と酒を楽しく飲める日であった」とU氏（70歳代の男性）も、当時を懐かしんでいる。そこには、同じ郷土杉野屋に住む仲間同志という地縁で結ばれた強い絆、一体感・連帯感が汲み取れる。B氏は、「窮屈な日常生活、労働から解放されて、何もかも忘れて神輿を担ぐのは最高だったよ。何ともいえない爽快感があったよ」と語る。また、戦前、戦後間もない頃まで、獅子舞に関係していたC氏は、「獅子は、自分にとって、生き甲斐であり、誇りであった」と述べている。

戦前を生き残った人にとって、秋季祭礼は「区民たちに生きている一体感」を与え、コミュニティの明日への活力の源泉・再生となったに相違ない。

## VI. 考察

獅子舞は、基本的には、幻想的な造形美術と、リズムカルな舞によって、超自然的な世界または存在との接触を図っている。

獅子頭は神そのものでなくても、神に近い神聖性を持っていることが伺える。これは杉野屋地区の共有物であり、神社に属するものではない。天満宮の秋季祭礼、三十三年祭に出すと見るよりも、むしろコミュニティの獅子が祭礼において、神社に参拝すると見るべきであろう。祭礼では、神社だけが獅子の礼拝の対象になるのではなく、観音堂や地藏堂にも参拝している。また、地区の班長宅（以前はイエ1軒1軒）や神輿を招待した新築の家なども獅子舞の祝福に預かるのである。時として、獅子が求められて他所に病魔祓いや落成祝いなどに出張することがある。しかし、これはあくまでも臨時の場合である。

戦前の祭礼と戦後のそれとは、社会の変化やそれに伴うコミュニティの変容によって大きく変化した。

聞き取りによると、1975年前後から杉野屋の祭礼については、衰退していつているとの声がある。その最大の要因として、コミュニティ（地域社会、イエ・ムラ）の解体を指摘するのは容易であろう。杉野屋では、1960年頃から祭りの実働的な担い手であった若者層を中心に、次男、3男は勿論のこと長男までがムラを離れ（進学も含め）、都会に移った。このことにより、昔からの相対的に自立的なムラ社会の生活が崩れていく。そうして、A氏の言葉を借りるならば、「それぞれ個別的な関心から高い所得と快適な私生活を目指すことになったのである」。少子化、高齢化などの波が杉野屋に押し寄せ、従来祭りの維持が、著しく困難になるとともに、「こんなにカネやモノをかけてまで祭りをを行う理由がどこにあるのか」という言葉まで飛び出すほどに、祭りへの意識が薄れているともいえる。祭りの最大の社会的機能がコミュニティの（再）確認にあるとすれば、祭りの社会的基盤そのものであるコミュニティの解体は、直ちに祭りを不必要にも不可能にもするはずである。

しかし、今、何故、祭りなのか。現代社会において、祭りが必要なのか、また可能なのかという疑問が湧く。

かつての杉野屋は、公務員や教員が多い地区であるといえども、7軒～10軒の「結い」（エー）制度など、小さなコミュニティの内部の協力・共同作業が盛んに行われていたようである。そうした時代には、区としても区民に全体的な相互関係を確認させ、在所（「われわれ」）意識を強化する祭りは、不可欠であったと思われる。ところが、高度経済成長期以後には、他所への勤務などにより、地域社会の維持と機能に陰りが出ている。さらに、モータリゼーション社会となり、羽咋市はいうに及ばず七尾市、金沢市は充分通勤圏内となった。区民の目は他所に注

がれることとなり、人間関係もムラ社会から広域となり杉野屋から相対的に自立し、自己の個別的な目的に合わせて一時的、部分的に関与するようになってきている。C氏は、これを「個人化」と称している。

秋季祭礼の衰退が、いつ頃から、どのようにして生じたのかはよく分からない。しかし、今日でも住民の間には、祭りに期待する気持は残っている。それは、「伝統的な杉野屋の獅子舞を絶やしてはいけない」といった発言に現れている。以前ほどではないにしても、なによりも日常生活のしがらみや平凡さから解放される「非日常性」に祭礼を位置づけている点が見られる。また、日々の活動によって衰えかけていた全てのエネルギーが祭礼で再生されている。

しかし、さまざまな刺激が常に溢れている昨今、「祭礼の日常化」と「日常の祭礼化」とが、現代の祭礼の存在を危うくしていると思われる。現に、志雄町の山手の所司原、針山など2〜3の集落では、高齢化、過疎化、少子化などによって人足不足から、獅子を舞わすことも、神輿も出せず、集会所で飲食（直会）を行う祭礼となっているようである。現代の祭礼は日常性からの脱却が難しい、という事情にも留意する必要がある。つまり、日常生活が祭りに近付くのは裏腹に、先祖伝来の祭礼は、日常生活から切れにくい。毎日、3食常に、祭りのようなご馳走が食卓を占めている一方で、山手の集落のコミュニティのように、祭りの日常化の進行が見られるのである。

かつての祭礼が「非日常的」だったのは、コミュニティの成員総参加の行事であり、神への信仰心だけでなく、そこでの行事全体の非日常性が日常生活と明確な対比をなしていたからであろう。

いま、杉野屋では、「班祭り」の形態をとり協力し合っている。また、獅子舞の演奏者が青年団にいないければ、女子中学生の3人が助け手となっている。

住民のコミュニケーション、相互交流の場ともいえる性格を持っているのが祭礼である。さらに、祭礼は、地域活性化の原動力になっている。即ちそこには、現代の社会維持のための「知恵」というものが潜んでいる。以前「昔から大切に伝えられてきた生活の知恵を失った時、その民族は滅びる」ということを聞いたことがある。杉野屋の役職員協議会は、コミュニティの維持を目的として、祭礼を執行している。

また、神輿修復のために、予想外の680万円ほどの協力金が集まり、この神輿修復を祝うために、8月11日、「神輿修復記念祭」を実施しているほど住民の間では、神社や祭礼に対する協力体制が確立されている。このことから、杉野屋区民は、いかに「祭礼」に思い入れを持っているかが理解できる。

住民のコミュニケーションの場でもある祭礼は、今後も、コミュニティの維持に大きな役割を果たしていくに相違ない。

## Ⅶ. おわりに

「祭礼」になると、ヒトは特別な気持ちになることは事実である。

日頃、自分の身体に背中があることを意識していないが、それが痒くなったり、痛みなどを感ずるときにその存在に気がつくように、「祭儀」における集合的沸騰を契機とする「日常」から「非日常」への転換時に、人は何かを感じ、イエとムラを意識する。転換時でなくても、準備段階から意識し始めているのかもしれない。

既に消滅した祭りもあるが、元旦祭から始まる年中行事として杉野屋の祭礼は、コミュニティ維持の役割を担っている。農業の比重は減少したとはいえ、新たな生命が瑞々しく胎動し始める春から夏、やがて秋の収穫となって収束する、こうした四季の循環と、再生を軸に祭礼が展開され、継承されてきた。神に豊穡を感謝し、神饌（供物）を捧げ、神人合一化をはかる秋季祭礼に一役かっているのが、ベッサイ、天狗であり、獅子舞である。そこに杉野屋に住む人たちの心の底に刻み込まれた宗教観があり、祭りの意味があるように思う。

高齢化、過疎化、少子化などが進展する中、神の営みを実践する祭礼である以上、コミュニティの英知が結集されていくことだろう。

## 注

- 1) 『石川県羽咋郡誌』、『石川県神社誌』、古老たちの言い伝えなどを参考に、当時の区長、宮司他6人が協議し、『志雄町史』編纂に向けまとめあげ、1974（昭和49）年4月15日に「天満宮本殿遷座祭についてのお知らせ」として、配布したものである。
- 2) 注1)と同じ資料による。